

糸乗 貞喜

(よかネットNO.3 1993.5)

前号で知的インフラストラクチャーについて書いたところ(本誌では前述)、いろいろな意見を頂きました。また、その間「新社会資本」ということが、景気対策として出ました。ところが、この社会資本は、一部で科研費などを含めると議論が出ているものの、ハードウェアとしてのインフラが対象です。私もはこのような社会資本が、その時代を築く重要なものだと思いつつも、次の時代に向けた整備は、文化・科学技術の基礎(活動の仕方やそれを支えるシステムも含めて知的インフラとする)を強める必要があると考えてきました。そして、それはあらゆる地域で不可欠であると思います。

このような問題意識で、NIRA(総合研究開発機構)へ研究助成をお願いし、大学の先生方でチームを作ってください、一応まとめることができました。以下に記載する文章は、そのうち糸乗が担当した「序文」と、読み物になりそうな「ケーススタディ」です。

### 序文

この研究は、今後の地域社会の発展の最も重要な基盤をなすものが、“知的インフラストラクチャー”であることを示すために行ったものである。明治以降の国づくりから

日本の近代100年の成功は、明治当初からのインフラストラクチャー整備によるものとみられる。それは世界的にも大きく評価され、発展途上国のモデルとして見られてきているが、最近では社会主義諸国の行きづまりを打開するモデルになると見られたり、教育制度の面ではアメリカでもモデルにしようとする動きが出ている。この経過を簡単にたどってみると、次のようなプロセスがうかがわれる。

### 意識・アイデンティティの一致

日本の植民地化を防ぎ、早く近代国家になろうという思想が国の指導者層の多数をとらえていた。

### ソフトインフラの整備

まずはじめに取組んだのは、法制度の確立と教育制度の整備であった。いち早く欧米へ留学生を送り、近代国家のシステム、科学技術などを学び、それを日本に導入した。また、それらを定着させるために初等から大学までの教育制度を整備した。これは、全国をひとつの均質な社会として築くための知的インフラづくりである。

### ハードインフラの整備

鉄道、道路、港湾、郵便、電話、電力などが全国にはりめぐらされた。ハードの面での均質なインフラ整備となった。

### 全国的な画一的で効率的な基盤による工業化

の教育制度が生み出した均質で質の高い労働力と の全国的にはりめぐらされたハードインフラが、法制度のもとで、治安の安定した社会を工業化する基盤となった。

第2次大戦後の建設を通じて、世界的な経済大国、高所得水準の社会へ。

### 戦後復興期の国づくり

また、第2次大戦後の復興期だけをとってみても、 ~ と同様の次のようなプロセスがみられる。民主日本の建設と財政復興という国民的な合意形成

それに対する法制度と復興計画(傾斜生産方式)

ハードインフラ(石炭、電力、輸送など)に対する傾斜投資と農業振興による食糧増産

重点地区を決めて(工業特別地区、新産都市など)工業化の推進を図ると共に、技術導入 に対する政府の支援

これらのプロセスの と が知的インフラをなすものであると考えられる。

本研究では、このような問題意識の上に立って、インフラ概念の整理、 地域での多様な研究活動の必要性、 九州の伝統、 それを踏まえた九

州で考えるべき知的インフラ支援の市民機構の提案を行った。

市民参加による知的インフラ形成への活動

～川を美しくする活動で生まれたまちづくりと産業創造(柳川市)～

柳川の水の再生が何をもたらしたか

柳川の水がよみがえった話をきこうと思って、まず「柳川の水がきれいになって観光客もずいぶん増えたでしょうね」と言ったとき、「我々は観光のことなど全く念頭にありませんでした」という、かなりきつい反発を受けた。「ただ何とかして、美しかった柳川の水を取り戻したかったのだ」という自負は極めて強い。しかし、現実の問題としてみると、「水を取り戻したこと」の観光への効果も極めて大きいと考えられる。

しかし、その河川浄化は、観光のために行った時には失敗し、観光のことなど念頭になく、ただ「水を取り戻さないと柳川はなくなる」という思いから始めたとき、水も守られ、観光の柱にもなったといえよう。そして今、観光は市の産業の柱ともなっている。

柳川の水にかかわる動き

飲料水であった

- ・1896年(明治29年)「飲用河川取締規制」
- ・柳川藩時代から飲用水としての管理はきびしなかった
- ・この辺一帯は干潮域であるため、井戸水には塩分が含まれていることが多く、飲用にも農業用水にも不適なものが多い
- ・堀にたまった水が、農業用水として、繰り返し使われた(足踏み水車)

上水道が普及、舟運も陸上輸送へ

- ・1953年(昭和28年)、西日本大水害
- ・1954年(昭和29年)、上水道一部通水開始
- ・飲用水でなくなり、人々の川を大切にする気持ちがあがると、ゴミ捨場となりはじめる

- ・1960年(昭和35年)、矢部川上流にダム建設、貯水開始

- ・矢部川からの通水が減り、川の流れが悪くなる

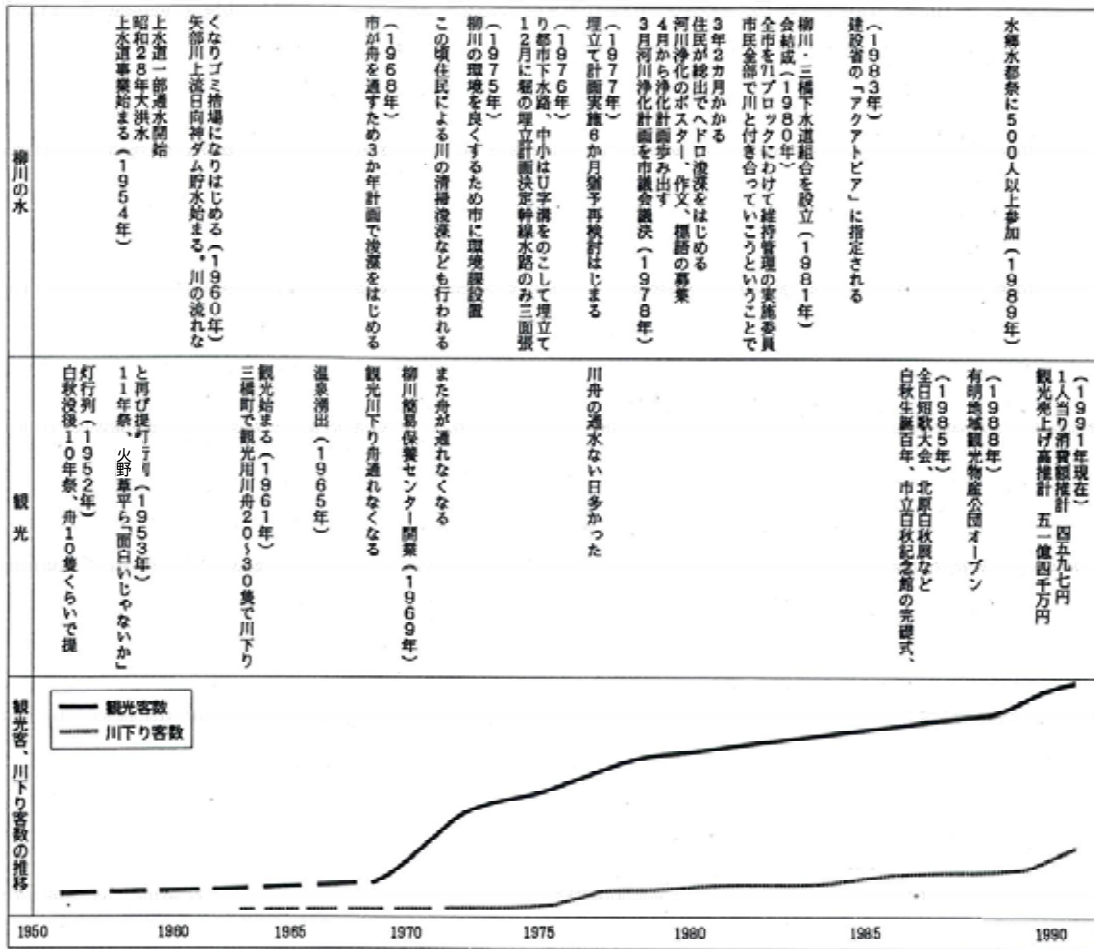
観光川下り舟のはじまりと行きづまり

- ・北原白秋没後10年(1952年(昭和27年))に火野葦平らが来て、農業用の川舟10隻くらいに分乗して提灯行列
- ・翌年も「面白いじゃないか」と再び柳川を訪れ、川舟で提灯行列遊びをし、白秋祭を行う
- ・1961年(昭和36年)、三橋町で観光用川舟20～30隻つくり、川下り始まる
- ・川舟が一部通れなくなる(1967.8頃)

浚渫の行きづまりから堀割の埋立計画へ

- ・1968年(昭和43年)、3か年計画で市が第1期浚渫
- ・浚渫後もゴミ捨てはとまらず、堀が深くなったので、捨てたものがわかりにくく、捨てやすくなった面もある
- ・観光舟の川下りのためという目的の浚渫ということで、住民の支持が少なかったのかもしれない
- ・蚊の異常発生、悪臭などひどく“ブーン蚊都市”とマスコミにやられる
- ・4年後(昭和49年頃)、また舟が通れなくなる
- ・堀の上を勝手に私物化する不法占拠などもおこる
- ・1975年(昭和50年)、柳川の環境を良くするために市役所に環境課設置
- ・全市をあげて堀割問題を1年半かけて検討、「手がつけられない」と結論。川下り用などの幹線水路は残して重点的に維持管理し、その他は埋めたり、都市下水路にする計画を決定

柳川の水よ、よみがえれ



図表1 柳川の水・観光の歴史と、観光客数の推移

- ・埋立て計画の再検討
- ・柳川はきれいにしつて残すべきだ。堀がなくなると遊水機能も失われる。水害にも弱い都市になる。ゆとりややすらぎも失われる
- ・地下水涵養機能が低下すると、地盤沈下も起こりやすい
- ・1977年(昭和52年)、市長が埋立計画の実施を6ヵ月猶予、埋立計画の見直しをさせる。この頃川舟の通れない日多し
- ・1978年(昭和53年)、3月に河川浄化5ヵ年計画が議会決定
- 住民総出で、ヘドロの堀へ入り浚渫作業
- ・住民懇談会で繰り返し計画の説明、協議・住民現地見学会をして、堀割の惨状を見る
- ・住民だけの懇談会で、不法占拠の自主的撤去が話し合われる
- ・住民総出で、3～4メートルおきにヘドロの水路の中に並び、皆がスコップでヘドロをかき出した。それをダンプで搬出した
- ・浚渫は業者に一切たのまず、住民参加で市直

営でやった

- ・住民参加の浚渫が維持管理の力を呼びおこした
- ・市民全部で川と付き合っていこうということで、全市を71ブロックにわけて維持管理の実施委員会

観光川下り舟は現在170隻となっている  
柳川の河川浄化計画は成功した

この柳川の河川浄化計画の成功は、地域の多くの人々が、きれいだった頃の堀割を記憶していたからだといわれている。もうあと何年かたって、住民の管理によって美しい堀が維持され続けていた頃の人々がいなくなって、記憶が消えてしまったら、住民参加による浄化はできなかつたらうといわれている。そのことは、市役所主導の浚渫が、維持管理に対する住民の協力がともなわれず、結局不成功に終わるということであれば、“志”がいかにか大切に示していることになる。つまり、地域にある記憶・志・知恵の次世代への受け継ぎが、地域づくりにとっていかにか大切に教えてい

る。この浄化事業のプロセスを整理してみると次のようになる。

住民がきれいにしようという意志をもつ

地域の人たちの心の一致がある

浄化計画が決定される

システムが決まり、市の担当がコーディネ

ーターとして位置付けられる

浚渫作業は住民の総力と市役所の機器の協力で進められた

具体的な作業（ハード対応）がされる

維持管理に対する住民参加 運営の安定

観光川下り舟170隻 波及効果の発生

これを整理すると、「記憶や思想の統一とシステムの決定・合意形成」が知的インフラを意味し、その上でハード対応をし、さらに運営があって波及効果が発生したということになる。柳川の流れがよみがえった活動の中に、知的インフラの重要性を見出すことができる。

追記：この頃、情報化社会への転換を成し遂げていくための知的インフラが、極めて多いということを感じていた。明治日本が、日本人としての「自立・独立意識」を持つことによって、欧米の植民地となることをまぬがれた。柳川も市民が「堀川をきれいにしよう」という気持ちをもつことによって、美しい堀川と観光収入がもたらされた。そういう身近な事例に学んで、九州が「知的インフラ」を強めていくことを念じたものである。現在も同じことを言い続けているのだが……。 （2004.5 いと）